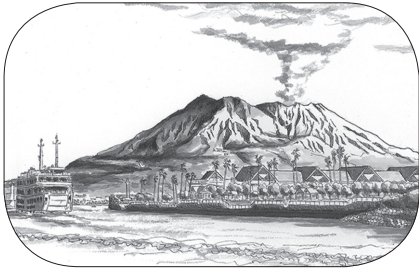


令和5年度

鹿児島県の教育

9月号



巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会小学校長部会副部長

鹿児島市立山下小学校長

下 假 屋 誠

「図り」「計る」、采配を振る冥利

高校野球を観ている。子供の頃から大の野球好きで、地名も、言葉も、割合の計算式まで野球を通して覚えた程である。ただし、本格的に野球をやった経験はない。

「何でここでバントしないの。」「そこに投げたらそりゃ打たれるよ。」全く経験のない素人が、いっぱしに野球の「定石」を持ち出し、監督の采配について解説者気取りでテレビに向かってしゃべっている。結果を見てから批評する完全な後出しジャンケンである。

学校の指揮官である校長の采配は、素人解説者の後出しジャンケンとは違う。日々、判断が求められる中、積み上げられた校長判断の定石は頼りにしたい。しかし、定石が常に最良の結果をもたらすとは限らない。例えば事故が発生し、教頭を窓口にして組織的に対応するのが定石でも、「校長の動きが見えない。」「校長が先頭に立たない。」と受け止められることもある。定石は、用いる前の吟味が絶対条件である。ここで定石が最善かをよく考え、最善と考えるなら迷わず定石を採り、そうでなければ、すかさず定石を捨てる。これが策を「図る」ことだと考える。

また、策には講じるタイミング「旬」がある。同じ策でも、時期を誤れば、効果は激減する。

初回、先制点のための送りバントは有効でも、点差の開いた九回になっての送りバントに同じ効果はない。定石を踏むとしても、最大の効果をもたらす絶好のタイミングを「計る」のは、これまでの経験に裏打ちされた校長としての感覚に委ねられる。

一方、判断に迷い、どうすべきかを相談したときに、「校長判断」と返されることがある。とても冷たく、突き放されたように感じるが、「校長判断」とは、「校長として信頼するあなたの判断なら、全てを受け入れて共に責任を負うから、思いどおりに判断せよ。」との最大級のエールである。どのように「図って」「計って」もよいとお墨付き、このエールを意気を感じて、最高の結果を求め、校長として最善・最良の判断をしたい。

さて、九回裏、一点ビハインド、ノーアウト一塁、打者はここまで無安打ながら県大会を引く張って来た三年生の四番、県民は十年ぶりの一回戦突破を期待している。あなたが監督ならバントで送らせるか、打たせるか、また、その指示はいつ、どのように出すか。どんな場面でも、采配は「指揮官（校長）の裁量」であり、「指揮官（校長）次第」である。

令和5(2023)年 9月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	3	趣味・文芸	17
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	18
子どもが輝く教育	7	総務部だより	19
心に残るひとこと	9	一般財県校長会館だより	20
ある日の校長講話	11	編集後記	20



小さい南の島知名町のでっかい企て 〜ハチドリの一滴〜

知名町長 今井 力夫
いまい りきお

新聞、テレビで地球温暖化、自然災害の多発化、持続可能な開発目標（SDGs）などの文字を見ない日はない今日。

教職最後の勤務場は、約四〇年ぶりの故郷沖永良部。外界離島の条件不利性という言葉を見て聞きしたことはあるが、久しぶりに住んでみて実感した。台風が接近し、通過するまでの約一週間物流が止まり、その間停電もあり、食料品などが店頭から消える。発電所の燃料は約一か月間の備蓄はあるそうだが、もし港の岸壁が台風で破壊されると一か月で岸壁の修復は不可能で島には電気がなくなり、全ての生産活動が停止してしまう。台風をはじめ自然災害は激甚化・多発化しているが、これらの原因のひとつが地球温暖化であることは、多くの学者が唱えるところである。宇宙船地球号の乗組員としてストップ地球温暖化への取組は避けては通れない。

今、知名町の責任者として、町民が安心して暮らすことができ、将来にわたり持続可能な町づくりを世界的な視野で考えたとき、地球環境保全や温暖化による気候変動にブレーキをかけなければならぬ。温暖化要因である二酸化炭素を極力出さないエネルギーシステムはどうしたら創れるのか。

現在、島におけるエネルギーは全て化石燃料によりつくり出されている。自然エネルギー（太陽

光、風力など）で島の電気をつくり、電気の自給自足化と極力島のお金を島外に出さない域内循環経済を実現することが、この島が持続可能な島になることにつながると考える。環境省は「二〇五〇年カーボンニュートラル実現」に向けて、第一回脱炭素に取り組み自治体を募集した。離島における脱炭素社会のモデルになる計画を提案し、昨年六月に脱炭素先行地域として全国二十六自治体のひとつに選定（鹿児島県で初、九州で三か所）された。日本全国には四〇〇余りの有人離島があるので本町の取組はこれらの離島の脱炭素化のモデルになると確信している。

この計画は四つの取組からなる。一点目は、電力のマイクログリッド構築。町内を四〇程の小さなエリアに分け、それぞれにおいて自然エネルギーによる発電と電気の供給を行い、エネルギーコストを抑制できる。また、台風等による停電があっても一部エリアのみの修理で済み、停電時間も短時間に抑えることができる。二点目は、公共施設を自家消費型太陽光・蓄電地の導入により省エネ・再エネ・畜エネ化を進める。特に、今回建設中の役場庁舎は九州では珍しいZEB（ネット・ゼロ・エネルギー・ビル）化された庁舎である。三点目は、二酸化炭素排出量の最も多いモビリティ（車などの移動手段）のEV化を図る。公用車や公共機関の路

略 歴

昭和50年3月	沖永良部高校卒業
昭和56年3月	高知大学理学部卒業
昭和57年3月	高知大学理学部聴講生卒業
昭和57年4月	神戸市立押部谷中学校（教諭）
昭和62年4月	阿久根市立阿久根中学校（教諭）
平成2年4月	与論町立与論中学校（教諭）
平成5年4月	山川町立山川中学校（教諭）
平成10年4月	鹿屋市立鹿屋中学校（教頭）
平成13年4月	名瀬市立名瀬中学校（教頭）
平成16年4月	龍郷町立龍北中学校（校長）
平成19年4月	日置市立東市来中学校（校長）
平成23年4月	鹿屋市立鹿屋中学校（校長）
平成26年4月	知名町立知名中学校（校長）
平成29年3月	知名町立知名中学校定年退職
平成29年12月21日	知名町長就任
令和3年12月21日	2期目〜現在

線バスのEV化と高校生の通学バイクのEV化を進める。四点目は、ゴミの焼却を減らし、生ゴミなどは有機肥料としての資源化を図る。

「二十一世紀は環境の世紀」、「Think globally act locally」である。六〇〇〇人足らずの小さな町の取組は、直接的に地球環境問題に大きな効果はないが、「ハチドリの一滴」「バタフライエフェクト」という言葉もある。個人、小地域の行動がドミノ倒しのように世界中に広まり大きなうねりになることもある。知名町の小さな取組だが、この取組が成功すると他の有人離島でも大いに活用できるし、何よりも島の子どもたちが地球規模で物事を考える機会にもなり、また、自分の町を誇りに思い、町に愛着を持つようになることを確信している。



子どもが楽しいと思える学校に

湯之尾小(始伊) 下 脇 雅 浩

一 はじめに

本校に赴任して三年目になる。「学校楽しい」とや「全国学力・学習状況調査の児童質問紙」等で、「学校の楽しさ」の実態を見ると、少なからず「あまり楽しくない」と答える子どもたちがいる。本校の校歌は三番まであり、いずれも「楽しい湯之尾小学校」という歌詞が入っている。しかし、先人の願いとは裏腹に、現状は、他者への乱暴な言葉遣いが見られたり、不登校の子どもも数名いたりする。こうした課題は、本校だけでなく全国的な課題であり、不登校の子どもたちは増加傾向にある。では、学校が楽しいと思えるようにするにはどのようにすればよいのだろうか。

二 楽しい学校とは

朝起きて学校へのワクワク感をもって全員が登校できるようになってほしい。「知らないことが分かる楽しさ」「友達と協働する楽しさ」など、そもそも家庭だけでは味わえない魅力が学校にはあるはずだ。しかし、インターネットやゲームの普及により、バーチャ

三 生命と人権を尊重する行動力の育成

まず、学校の全教育活動を通して行う「道徳教育の改善・充実」を目指している。心は目に見えないが、行動に表れることを常々子どもたちへも指導している。自分の行動が、相手を不愉快な気持ちにさせていないかを振り返らせながら、よい行動を強化するよう

ルな世界で体験したつもりになったり、豊富な情報の中で、世の中のことを知ったつもりになったりして、学校の魅力が薄れてしまっている。国の次期教育振興基本計画の中の今後の教育政策に関する基本的な方針の一つに、「誰一人取り残さず、全ての人の可能性を引き出す共生社会の実現に向けた教育の推進」が掲げられている。子どもが抱える困難が多様化・複雑化する中で、個別最適・協働的学びの一体的充実やインクルーシブ教育システムの推進による多様な教育ニーズへの対応が求められている。こうした点を改善することによって「楽しい学校」として魅力を再構築できるのではないかと考える。そこで、私は次の二点を掲げて学校経営を行っている。

認め励ましている。「さわやかあいさつ運動の推進」や「親切な行動の実践」は、本校では少しずつ改善されてきていることが学校評価等でも認められつつある。さらに、高学年のリーダー育成を行い、「縦割り活動の充実」を推進することで、学校全体への波及効果をねらっている。

四 一人一人が輝き社会性を高める学級づくり

次に、子どもたちへのアンケート調査等で「自己肯定感や自己有用感が低い」実態が、本校には見られた。人間関係の構築に課題のある子どもが増えてきている現状もある。その子どものもつ発達上の特性や家庭環境の影響などもあり、「いじめ・不登校の早期発見と対応」を心がけている。また、「教育相談の充実」も子どもや保護者との信頼関係を築き、寄り添った支援へとつながってきている。そして、「自他のよさや違いを認め合える学級づくり」を大事にすることで、多様性の中で、一人一人が輝き社会性を高めることにつながると思っている。

五 おわりに

私に残された校長としての時間は少ない。校長としての最後の学校経営を少しでも提言で述べたような理想に近づけていきたい。先輩の校長の置き土産で校長室に掲示してある「二人の子どもを粗末にすると湯之尾小の教育は光を失う」という言葉を胸に、子どもが楽しいと思える学校にしていきたい。



校長の品格

増田小(熊) 田川 博 和

一 はじめに

「提言を執筆(寄稿)することになった。何について提言をするか。ふと書棚にある「国家の品格」(藤原正彦著)が目にとまった。「品格」とは何か。日本国語大辞典には、「物の性質のよしあしの程度、品柄、品質、身分や位・格式、品位、気品」とある。

校長の品格は、学校経営や教育の質を向上させる上で必須要素であり、「薫育、学び続ける姿勢、実践」の三つの要素が重要であると考えた。私に品格があるというわけではなく、校長の品格について考え、提言したい。

二 提言

(一) 薫育くわんいく

薫育とは、「かおり(香り)を放つ教育」という意味をもつ。校長としての品格は、優れた人間性を持ち、学校コミュニティに温かい香りを広げることが求められる。「薫育」は教育の現場において人間関係を築く上で重要な要素であり、信頼と尊敬を醸成

する力をもっている。

私は、薫育は校長としてリーダーシップを発揮するための重要な要素であると考える。教職員や児童とのコミュニケーションにおいては、心を込めて対話し、共感し合う姿勢を大切にしている。教職員が日々の教材研究・教育活動に真摯に取り組み、児童が自己肯定感を高められるような、安心できる学びの環境を提供することで、学校全体が活力ある組織として成長することを目指している。

(二) 学び続ける姿勢

校長としての品格を高めるためには、常に学び続ける姿勢が必要である。様々な媒体からの情報収集や読書により知識を広げ、創造力や思考力を高めたい。教育においては、オンライン授業、デジタル教科書、GIGAスクール構想、生成AI等の時代の変化をキャッチし、最新の教育理論を把握することが不可欠である。情報収集

や読書を通じて、教育に関する知識や教育改革に対する洞察を深め、学校の発展・学校経営の改善に努めることが必要である。

(三) 実践

校長としての品格は、理論だけではなく、実践力を高めることも重要である。校長自らが提唱する教育理念やビジョン(グランドデザイン)を具体的に実践し、学校を発展させることである。私は、学校経営において実践重視の姿勢をとっている。教職員や児童に対して、理想を示すだけでなく、実際に行動に移すことで教職員、児童、保護者、地域の方々との信頼関係を築き、学校の課題を解決し、教育目標達成に努めるようにしている。

三 おわりに

令和の時代は、急速な社会変化とテクノロジーが大きく進歩する時代であり、これによって教育に求められる役割や価値観も大きく変わりつつある。世の中が変われば、それに伴って学校に求められるものも変わる。「薫育」、「学び続ける姿勢」、「実践」に注力することで、学校のリーダーとして品格を築き、教職員のプロフェッションナリズムを尊重し、児童の個性や可能性を最大限に引き出す教育環境を創造していくことが大切であると考えている。教育は「国家百年の計」である。将来の日本を担う子供たちのために。



インプットからアウトプットへ

三島竹島学園(郡) 濱田和彦

本校は、鹿児島港からフェリーで約三時間の三島村の玄関口に位置する竹島にある離島へき地校である。竹島はその名の通り、島全体が琉球竹に覆われた周囲約九・七km、島民五九人の小さな島である。

児童生徒は、島民の方々に温かく見守られ、豊かな自然の中で伸び伸びと学校生活を送っている。

過疎化が進む中、平成九年度から始められたしおかせ留学制度(山海留学制度)により、児童生徒の確保に努め、学校や地域の活性化を図っている。また、令和二年度に竹島小中学校から義務教育学校の三島竹島学園に改称され、今年度が四年目になる。

いち早く遠隔教育に取り組み、竹島の自然や義務教育学校の利点を生かした教育実践を行っている。

〔遠隔教育で子供の学びの世界が広がる〕

ICTを活用した遠隔教育は、子供たちの学びに大きな変化をもたらした。双方向の交流が可能で、離れた相手と同じ授業を受け、同じ集団の中で多様な考えに触れたり、より多くの相手と交流したりすることが可能になる。本校のような小規模校の場合、その効果は計り知れない。本校で行われている遠隔教育には、複式学習を充実させるための授業、遠隔交流学習、専門家との授業などがある。

遠隔合同授業では、本校と他校の同学年の複式学級合同授業をつなぎ、両校の担任がそれぞれ一

つの学年を中心に担当し、複式を解消した授業を行うことができる。

また、ICTを活用した遠隔交流学習では、海外の学校との交流も広がっている。ベトナムとの交流学習は今年で四回目になる。日本と関わり深いベトナムの文化や生活に触れることができ、子供たちの世界がどんどん広がっている。

その他にも、大学教授や税関職員等の専門家との授業など、子供たちのニーズにあわせた授業づくりを行っている。昨年度は延べ三〇〇回の遠隔授業を行い日常化を図っている。本校は他にも様々なICTの活用を進めている。その中の一つが学校の公式インスタグラムへの投稿である。行事や授業の様子など様々なものが子供たちの手によって投稿される。現在は七〇〇投稿を超え、フォロワー数も六四〇を超えた。山海留学で遠く離れた場所で生活する実親さんにもとても好評である。

〔ジオ(地球)科でふるさと竹島を愛する心を育む〕

本校では「総合的な学習の時間」を「ジオ(地球)科」として取り組んでいる。この学習では、課題を解決するための思考力や判断力、表現力等を高めるともにかけがえのないふるさと竹島を愛し誇りに思う心情や態度を育成することを目的にしている。

主な学習内容は、ジオガイド、オンラインツアー、ハマギプロジェクト、ジャンベ活動などである。

ジオガイドでは、児童生徒が作成したジオガイドブックをもとにしながらガイドとして竹島の自然や歴史、文化等を伝える活動に取り組んでいる。これまで来校した大学院生や、県外からの観光客にガイドをしている。

オンラインツアーは、五・六年生の児童が企画し、島内を取材して完成させた竹島の魅力を紹介する動画である。紹介する場所やコメント、動画の編集など担任の教諭と協力しながら作り上げた。学んだことを多くの人に伝えたいという子供たちの思いが伝わってくる学習である。ハマギプロジェクトは、地元で自生するハマギ(正式名称・ボクタンボウフウ)を使つて竹島を多くの方に知ってもらい、竹島を応援したいと思う人を増やすことを目的にスタートした。

今年で四年目になるこの学習は、国語の学習の中で企画会議を行い、美術の時間にマスコットキャラクターのデザインやパステルでデザインを考え、家庭科の時間でハマギ餃子の試作に挑戦するなど、ジオ科を中心としながら教科横断的に学習を進め、自分たちの考えや思いを形にできた。

〔三島村の良さをフルに生かして〕

ギニアとの交流が二七年間続いている三島村の子供たちは、ジオ科の時間に西アフリカの太鼓であるジャンベを学んでいる。県の音楽コンクールである夏の祭典に出場し令和二年、令和三年と金賞を連続して獲得することができた。自然豊かな竹島ではその自然をダイレクトに体験できる教育活動にも取り組んでいる。その一つが海での水泳学習である。美しい魚が泳ぐ中での水泳学習は、子供たちがとても楽しみにしている学習の一つである。

五・六月は竹島の名にふさわしい大名竹(琉球竹)の筒探りの学習が行われる。この学習で収穫した筒は島外に出荷されたり、給食に出されたりする。

三島竹島学園の特色ある教育活動に共通することは、「インプットからアウトプットへ」。この島で学んだことをより広い世界に向けて表現し、発信することで、より深い学びへとつなげている。



郷土(シマ)を愛し心豊かで心身ともに

たくましく自ら学ぶ小湊の子の育成

小湊小(大) 竹 平 勝 志

一 はじめに

本校区は、名瀬の市街地の中心から10km南方に位置し、東側には太平洋に面した砂浜と、西側には比較的大きな水田地帯(現在は耕作していないが、学校用に借用している水田がある)や山に囲まれた自然豊かな環境にある。小湊フワガnek遺跡も発掘されており、歴史と伝統ある校区として知られ、二つの集落で構成された校区では、「十五夜綱かつぎ」や「かえさる」などの伝統行事を今に伝えている。本年度は、創立百五十一年を迎える。現在、複式二学級と単式一学級の計三学級に八人の児童が在籍している。

二 学校経営の基本方針

教育目標「郷土(シマ)を愛し、心豊かで心身ともにたくましく、自ら学ぶ小湊の子の育成」、校訓「かしこく ただしく たくましく」の実現に向けて、子ども一人一人の個性と能力を伸ばす、地域に根ざした学校づくりに努めている。

三 取組の実際

(一) 個に応じた確かな学力の定着

ア 授業充実三ポイントの徹底

本地区では、「目標の明確化」、「山場の工夫」、「確かめ・見届け」の三ポイントを踏まえた、児童が自ら学びとる「質の高い授業」の実践に取り組んでいる。本校では、「振り返りでの一言感想やポストテストの実施」を学力向上の「一校一改善策」とし、児童一人一人が「わかった」「できた」を実感できる一単位時間の授業の実践に取り組んでいる。

イ 家庭学習の習慣化

授業の「振り返り」をもとに、児童一人一人が考えた自分のための学習「ひと勉」(家庭学習)に取り組んでいる。

(二) 豊かな心の育成

「笑顔であいさつ」「元気な一日」をキャッチフレーズとし、全ての児童が毎朝、笑顔で元気なあいさつができるよう、「楽しい学校づくり」に努めている。また、年間読書目標冊数(低学年百冊、中学年八十冊、高学年六十冊)の設定や家庭での一日十五

分間読書の推進、隣接する奄美看護福祉専門学校との学生による週一回の読み聞かせなど読書指導の充実に努めている。

(三) 基礎体力の向上

一校一運動「かけ足・なわとび」やチャレンジかごしまなどに、朝の体力づくりの時間や授業で、年間を通して取り組んでいる。また、体力テストの結果を活用した個別の運動計画の立案と運動の生活化に取り組んでいる。

(四) 地域に根ざしたふるさと教育の推進

本校の地域のよさを活かした特色ある教育活動には、「稲作活動」、「日の出会(高齢者クラブ)との緑化活動」、「島口・島唄に親しむ活動」、「舟こぎ体験活動」、「八月踊りの継承活動」などがあり、学校と地域が一体となって、活動を展開している。今後も、小湊のよさを活かした体験活動を充実させ、郷土を愛する思いやりのある小湊の子を育てていきたい。

四 おわりに

本校に赴任して三年目となるが、これまで様々な行事等が、新型コロナウイルスの影響で、中止や規模縮小を余儀なくされてきた。当たり前のことが当たり前前にはできないもどかしさを感じた二年間でもあった。

本年度は、感染状況も落ち着きを見せ、また、感染症法上の位置付けも「五類」に移行したことにより、徐々にコロナ禍前の生活に戻っていくことが期待される。様々なことに「当たり前」ではなく、「有り難い」と感謝しつつ、今後の学校経営に当たりたい。



地域に根ざし郷土愛を核とした 教育活動の推進

伊敷台小(市) 濱弓場 一 誠

一 はじめに

本校は、市街地に最も近い最後の大型団地として造営された伊敷ニュータウンの北側に位置し、鹿兒島市の中心部から北西へ約5kmのところにある。住民は、県内外から集まっております。地域づくりは学校づくりと一体となっており、地域づくりは学校づくりと一体となっており、地域づくりは学校づくりと一体となっており、地域づくりは学校づくりと一体とな...

二 取組の実際

(一) 夢の里教育

本校区は、新興住宅地であり、歴史に支えられた教育風土(基盤)が浅く、本校区と共に生まれた本校(創立三十一年)に対して、二十一世紀を生き抜く子供たちを育てる新しい教育を創造してほしいという大きな期待と思い、そして、地域も協力して新しい町を創り上げていこうとする強い意志がある。その思いを端的に表しているのが、学校・家庭・地域と共に考え、建立した開校記念碑である。碑文には次のように書かれている。

このまちでは 子供たちは遊びます
このまちでは 子供たちは遊びます
このまちでは 子供たちは遊びます
このまちでは 子供たちは遊びます
このまちでは 子供たちは遊びます
このまちでは 子供たちは遊びます
このまちでは 子供たちは遊びます
このまちでは 子供たちは遊びます
このまちでは 子供たちは遊びます
このまちでは 子供たちは遊びます

このまちは 子供たちのふるさとになります

本校では、この思いや願いを受けて、地域に根ざし郷土愛を核とした教育活動を推進していくことを再確認し、人間性豊かな人づくり、それを育む学校づくりをしていくことが、地域(まち)づくりにつながっていくものと考えている。

(二) 立腰教育

本校は、伝統的に授業開始に「姿勢 礼」と言わずに「立腰 礼」と言っている。この立腰教育とは、教育学者・哲学者でもある森信三先生の唱えた「心身相即(心を立てようとするれば先ず身を起こせ)」の教えを取り入れることで「やる気」「けじめ」を培い、何事にも強い意志を持って取り組む子供、自ら主体的に活動する子供、節度ある生活が送れる子供をめざす教育である。また、本校では、森先生が唱えている「しつけの三原則」「時を守り、場を清め、礼を正す」も併せて指導している。休み時間のうちに、授業準備・トイレを済ませ、場を清め、時を守らせる。授業が始まると、礼を正して「立腰」の姿勢を取らせ授業に臨ませるようにしている。

(三) あいさつ運動

森信三先生の「しつけの三原則」の「礼」を具現化するために、児童会を中心にあいさつ運動を行っている。児童会の役員が朝校門に立ちあいさつを励行している。最近

(四) 伊敷台まつり

学校と地域が一体となって大きな活動を行うというPTA主催の一大イベントである。

(五) 読み聞かせ指導

本校は、校舎の中央部の二階に三階まで吹き抜けの大きな図書館がある。「子供たちにたくさんの本を！」本校創建当時の保護者や地域の願いが込められていると伺った。そして、本校では、十五年以上活動している、読み聞かせグループ「いちよう」の方々に、毎週水曜日朝(職朝の時間の裏)の時間を利用して子供たちに読み聞かせを行ってもらっている。そのかいもあり、本校児童の読書冊数も多い。さらに嬉しいことに、読み聞かせグループ「いちよう」は、令和四年度県読書推進運動協議会から表彰をいただいた。

三 終わりに

本校は、創立三十一年の新しい学校であるが、「このまちで子供たちのふるさとにした」「このまちで子供たちが遊び・友達をつくり・学ぶ 夢の里にしたい」という地域、保護者の願いが作った学校である。今後も「つよい体によさしい心、よく考えがんばりぬく」の校訓を合言葉に地域に根ざし郷土愛を核とした教育活動を推進していく。



子どものよさを伸ばしていく

教育活動の取組

市来小(日) 山崎 和 正

一 はじめに

本校は、いちき串木野市の南部に位置し、白砂青松の吹上浜に面した自然環境の豊かな地域にある学校である。また、校区内にはJR鹿児島本線と国道三号が通り、南薩方面への幹線道路である国道二七〇号が学校の横を通っている。さらに、九州西回り自動車道の市来インターチェンジがあるなど、交通の利便性が高い地域である。

現在の児童数は二六一人、学級数は十三学級(特別支援学級四学級)である。児童は明るく素直で、高学年を中心に朝の委員会活動やボランティア活動、学級単位での縄跳び運動等に積極的に取り組んでいる。

昨年度には、創立百五十周年の佳節を迎えることができた。これまでの学校の歴史の中では、本校区に旧鹿児島第二師範学校が設置され、その附属小学校として位置づけられた時代があった。その教育的風土を今なお残しつつ、新しい教育の在り方にも先導的に取り組むなど、住民の教育に対する関心は極めて高い。

二 特色ある教育活動

本校では、「子どもが主役 楽しい学校」づくりに向けて、全職員が知恵を出し合いながら、そして、地域とも連携・協力した「チーム市来」として、本校の教育活動を盛り上げているところである。

(一) 幼小中一貫教育

市来地域には、一中学校、二小学校、一公立幼稚園がある。その中で、本校は市来中学校と市来幼稚園と隣接している。そのため、幼小中の連携を取りやすい環境にある。「幼小中一貫教育全体研修会・分科会」「小中相互乗り入れ授業」「小学校交流学習」「いも作り(幼小連携)」「幼小職員交流」などの取組を行っている。

特に、市来幼稚園とは、園長・副園長を校長・教頭が担っていたり、養護教諭が幼稚園の業務を兼務していたりする。そのため、幼稚園の様々な教育活動に参加する機会があり、このことで幼稚園教育への理解や園児との触れ合い活動の深化を図ることができる。

今後これら取組の成果を生かすとともに、取組を通して職員が交流を図ること

で、更に充実した幼小中一貫教育の推進を図っていく。

(二) 異学年による縦割り掃除活動

一年生から六年生の縦割りグループを編成し、異学年による清掃活動を行っている。上級生は、掃除の仕方や反省までの活動の中でリーダーシップを発揮して、下級生のよき手本となっている。下級生は上級生から学びながら、みんなで力を合わせて清掃活動に取り組む姿がある。

(三) 学校支援ボランティア

市来地域は、子どもたちのために何かできないかという意識が高く、学校への協力を惜しまない地域である。「年度当初の一年生下校見守り」「PTA時の託児ボランティア開設」「田植え・稲刈り・餅つき」「ミシン学習」など、様々な教育活動の中で御協力をいただいている。

こうした御厚意に報いるためにも、さらに子どもたちの笑顔を引き出し、学校から家庭や地域へ元気の波動を起こしていきたい。

三 おわりに

本年度は、市「人権の花」運動の指定校として、栽培活動を通じた人権意識の高揚や思いやりの心の醸成などに取り組んでいる。豊かな自然環境の中で、子どもたちが伸び伸びと活動する姿を求めている。また、学校や保護者、卒業生や地域の方々から温かく見守られながら、本校の教育活動の充実に向けた実践の積み上げに努めていきたいと考える。



手伝う気があるのなら

道具の一つでも持つてこんか

国分西小(始伊) 下 健一郎

初任校は、現在の南さつま市(旧加世田市)の小規模校だった。

ある日の放課後のことである。学級で授業の準備をしていると、当時緑化担当をしていた先輩がプール裏の畑に向かっている姿を見掛けた。多くの分掌を抱えながら、ばりばりと仕事をこなす先輩だった。

「何かお手伝いしましょうか。」

と、自分なりに気を利かせたつもりで、畑に向かい声を掛けた。すると、腰を下ろして作業をしていた先輩から、

「手伝う気があるのなら、道具の一つでも持

つてこんか。」

と叱られてしまった。

その後、一緒に作業しながら、

「次の学校に異動したら、〇〇はできませんとは言えないぞ。だから、この学校にいる間が勝負だぞ。」

といった内容の話をしてくださった。

本当にその気があるのなら、状況を見て、自分で考え判断し、行動できるようになりなさい。今のうちに様々な校務を、きちんと学んでおきなさいということを教えてくださっていたのである。

その後、多くの講話を聞いたり、書籍を読んだりして、様々な金言に触れてきたはずであるが、初任の頃にいただいたひとことについて寄稿している。

変化の激しい時代にあつて、主体的に判断・行動し、他者と協力しながら様々な課題解決に向かう心豊かで、心身ともにたくましい子供たちを育てるためには、私たち教師自身が、感性を磨くことや、周囲をよく見てよさや問題に気づき、思考・判断し、行動する力を身に付けることが大切である。

あれから三十六年。お前、本当にちゃんとできているのか、そう問われている気がして、身の引き締まる思いである。

伸びるいつもこれだけを 考え給え

秋名小(大) 南 一 秀

だれかさんが だれかさんが

だれかさんが みつけた

ちいさい あき ちいさい あき

ちいさい あき みつけた

めかくしおにさん ての なるほうへ

すました おみに かすかに しみた

よんでる くちぶえ もずの こえ

ちいさい あき ちいさい あき

ちいさい あき みつけた

童謡「ちいさい秋みつけた」の最初の部分(一番の歌詞)です。この童謡は「うれしいひなまつり」「リングの唄」などを作詞したことで知られるサトウハチローさんが作ったものです。一度は口ずさんだことがあるのではないでしようか。二学期が始まり、秋も今から深まりを見せ、子どもたちは、スポーツの秋・読書の秋・収穫の秋：：運動会、読書旬間、修学旅行(五・六年)、社会科見学(三・四年)、グラウンドゴルフ大会、持久走大会：：と、数多くの行事を通して、また周りの環境の移り変わりに気付いたり感じたりしながらその場面場面の中に「ちいさい秋」をいくつか見付けられることでしょう。

さて、サトウハチローさんの残したことばの一つに「伸びる いつも これだけを 考え給え」というものがあります。廊下には二十二人の子どもたちの立てた〇〇名人に向けての月ごとの振り返りが書かれています。子どもたちは日々心身ともに伸びていって成長しています。これからも「伸びる」ことを考えながら毎日〇〇名人という自分の目標に向かって過ごしていつてほしいと願っています。(令和四年十一月秋名小「学校便り」を一部改訂)

ビジュアライズ

入来中(北) 石畑 浩 一

高校時代の英文読解の授業で、恩師が授業中に何回か熱弁を振るわれた。その際の、心に残る言葉が、*visualize* であった。英文が表す情景の近くに、まるで自分が居合わせているかのよう、その場の様子を頭の中に思い描きながら英文を読み解いていくというやり方でも言えはわかりよいだろうか。辞書によると「視覚化する・想像する・思い描く・思い浮かべる」などの意味があると出てくる。少し物足りない定義に感じるのは、恩師の私自身を含む生徒たち

に、恩師たち自身が自信をもって「この方法がよい！」と勧める気持ちと「この方法をしっかりと伝えたい！」という熱を帯びた、特別な英単語が *visualize* ビジュアライズ だったからだと思う。

三十五年以上経過した現在、教授法が進化する中にあつても、私の中でも不変の最重要語であると信じている。私の教え子、我が子に対しても、恩師と同じくらいとはいかないまでも、熱く語ってきたつもりである。「*visualize* ビジュアライズ」しながら、音読していけば、たとえ、まだ意味を知らない英単語や表現が出てきたとしても、大筋の流れを掴みつつ、自分の持てる知識を総動員した推測も加えて英文に立ち向かいなさい。また、与えられた資料や挿絵・注釈をヒントとして、それらを最大限に生かしながらどんどん読み進めなさい。そうすれば、頭の中の情景におのずとキーワードが見えてきて、間違いなく正解に近づくことができるから」と *enthusiastic* エンジュージアステック に語ってきた。そう、当時の高校内の英語部会で議論され、この方法が、生徒に読解力をつけ、全体的な英語力上達につながることでできると共通理解してきたからこそ、熱狂的に語られ、そのご指導を受けた教え子が、自らの成長を実感する中で継承されてきたと言えるのだ。今後とも機会あるごとに、このありがたい

visualize ビジュアライズ を *enthusiastic* エンジュージアステック に語りたい。

チャンス チャレンジ チェンジ!

錦江中(隅) 平 國 弘 明

「チャンスは誰にでも訪れる。気付かない者もいる。気付いてもチャレンジしない者もいる。チャレンジした者は、やがてチェンジ変化・成長する。」これは、生徒の前で幾度となく話をしてきた言葉である。この言葉で忘れられないエピソードが二つある。

一点目は、長男が中二のときのこと。ある競技の県選抜選考会参加の機会を彼が得た。だが、彼は頑なに参加することを拒んだ。実は、その直前に同じ競技の別の選考会に参加し、落選していた。数日後、彼と話をした。おそらく夜十一時を過ぎていた。彼は涙ながらに「また、落ちたら嫌だ。」とこぼした。このとき、話したのが、前述の「チャンス、チャレンジ、チェンジ!」である。「他の人も頑張っているから、代表に選ばれるとは限らない。ただ、努力したことは残る。それが、このあとの人生に生きるんだ。」顔を上げた彼は参加を決めた。時計は

二時を回っていた。

二点目は、私自身の話である。異動の時期を迎え、M校長から異動先を告げられる。続いて、業務内容の大まかな説明を受けた。未知の職場と内容だった。自信の持てない私は、返事保留のまま校長室をあとにした。あれこれ、考えた。私が赴任に値する理由は浮かばない。だが、ここで天の声なのか、「チャンス、チャレンジ、チェンジー」「お前、生徒や息子たちに散々言ってきたのに、自分は逃げるのか。」と。自問自答が続き、子どもたちの顔が浮かぶ。「やはり、裏切れない。」迷いは消えた。翌日、M校長に「昨日はすみませんでした。」と、頭を下げ、頑張ることを伝えた。その後、赴任先での経験は自分の視野の広がり成長につながり、無論、今に活かされている。

あれから十二年。今年五月の放課後。役場職員と保護者が二人尋ねてきた。よく知る人物である。嫌な予感。笑顔が気になる。「先生、大会に出てください。」「はあ?」「地区大会ですから。」「無理無理、勘弁してよ。」「いつも子どもたちに言ってるじゃないですか。チャレンジしろって。」「∴。断れんなあーお。」五十も半ばを過ぎ、自分自身以外に「チャレンジしろ。」という人もなからうと思っていたのだが∴。

ここに至って、「発した言葉の責任はやはり重い。」と、以前にも増して思う次第である。

ある日の校長講話



人をつなぐ言葉と挨拶

宮川小(市) 茶屋 大作

この前、一年生から四年生のみなさんは一日遠足がありましたね。実はその時、とても嬉しいことがありました。遠足から帰ってきた先生の一人が、校長先生にあることを報告してくれたのです。その学年は、石橋公園でお弁当を食べたり遊んだりしていたのですが、その時公園でジョギングをしていた方が話しかけてくれたそうです。その先生は、最初、子供たちが何かしてしまったのではないかと、不安になったそうです。しかし、全く逆で、その方は「遠足ですか。どこの学校ですか。子供たちの雰囲気がとてもいいですね。挨拶もよくしてくれてと

ても気持ちよかったです。校長先生にそうお伝えください。」と褒めてくださったそうです。先生は、去年からみなさんにいつも心にとめて頑張ってほしいこととして、「頑張る5」を話しています。今年も、毎朝放送委員会の人たちがこの「頑張る5」を朝の放送の中でも呼びかけてくれています。「頑張る5」は、勉強や運動だけでなく、あなたたちが、人として立派に成長していくために欠かせないことだと思ふことを五つに絞って作っています。その中でも一番目をお願いしているのが「あたたかい言葉と挨拶を大切にしろ」ということでしたね。わたしたちは、毎日家族や友達など、周りの人たちと支え合ったり、励まし合ったり、協力し合ったりして生活しています。そのように、人とながつてこそ、わたしたちは、楽しく充実した毎日を過ごしていけるのではないかと思います。そのために、何よりも大切なのが言葉や挨拶です。言葉や挨拶は、自分の考えや気持ちを相手に伝えるだけでなく、人の気持ちを元気づけたり勇気づけたりする力も持っています。だから、その言葉や挨拶を生活の中で大切にしてくれたことがとても嬉しかったのです。これからも、言葉や挨拶を大切に、人とつながり合って楽しい毎日を送ってほしいと思います。

個性を認め応援し合える学校を

大笠中(南)山 口 浩 樹

今日はいつもと違う格好で皆さんの前に立っています。ポロシャツで裾を出してみました。

制服検討委員からの提案があり、現在、ポロシャツやTシャツで登校してもよいことにしています。ここから見ると今日は制服姿が多いようです。登校時に何人かに聞いてみると、終業式だから制服という理由でした。ポロシャツ登校の生徒は、動きやすい、着るのが楽、涼しいとのこと。それぞれの判断があつての現在の姿、どちらもそれで良いと思っています。

先日、芥川賞の発表がありました。市川沙央さんのハンチバックという作品でした。ニュース映像を見ていて考えさせられたことがあります。市川さんは車いす姿で、受賞した作品は身体に重い障害がある主人公の物語だそうです。インタビューで「重度障害者の受賞者も作品も『初』だと書かれるでしょうが、どうしてそれが二〇二三年にもなつて初めてなのか、みなさんに考えてもらいたい」と述べています。芥川賞を調べてみると八十年以上の長い歴史があるようです。それなのに初ということ、残念ながら日本社会はこれまで多様性を受け入れてこなかったのではないかと思うことです。実際に今でも市川さんのように辛い思いをしてい

る人がいるのではないかと思います。

さて、一学期の生徒総会では部活動に文化部を作つてほしいという要望があり、先日より文化同好会という形でスタートさせました。生徒会によるアンケートでは入部希望者は少数でしたが、皆さんがその友達のために応援するという姿が大変立派だと思いました。

服装や部活動を例にしましたが、人は見た目や考え方、やりたいことなどが違います。その違いを個性として認め合える、応援し合える学校や社会つて素晴らしいと思います。多数派が絶対ではなく少数派にも優しい学校や社会を、皆さんの手でつくりあげていきましょう。

答えの出ない事態に耐える力

伊集院高 濱 島 幸 治

学力と豊かな人間性、そして、健康や体力がバランス良く備わつた「生きる力」を育むためには、様々な経験を通して、気付き、考え、行動することの繰り返しが必要だと思えます。行動した結果が正解や成功でなく、不正解や失敗でも、そのサイクルの中にあることに意味があると私は考えています。皆さんに付けてほしい力は、答えの出ない事態に耐える力、性急に問

題を解決してしまわない能力のネガティブ・ケイパビリティというものです。

この言葉の日本語訳は定まっておらず、「消極的能力」「消極的受容力」「否定的能力」など多くの訳語があります。

六年前、こんな力を付けてほしいという思いを書いた文章を読まれた国語科の先生から、教えていただいた言葉です。

今の時代は、「こうすれば苦労なしで、簡単に、素早く解決しますよ。」という考えがもてはやされている気がします。しかし、このような解決方法ばかり求めてしまうと、結局は行き詰まつてしまうのではないのでしょうか。世の中にはすぐには解決できない問題の方が多く存在しますし、皆さんはますます見たこともない、聞いたこともない難問奇問に出会うに違いありません。そんな時こそこの力が必要になります。

解決すること、答えを早く出すことだけではなく、解決しなくても訳が分からなくても、持ちこたえていく。消極的(ネガティブ)に見えても、実際には大きなパワーが秘められている力、持ちこたえていくうちにいつか解決する日が来ます。

ネガティブという言葉は、ややもするとマイナスなイメージを受けるかもしれませんが、そうではないことを理解してください。正解が得られなくともなんとか持ちこたえる力を皆さんが身に付けられることを期待しています。

話のひろば



“Only time will tell.”
「時が経てば分かる」

内山田小(南)
内村 健二

今シーズン、MLBで超人的な二刀流の活躍を見せ、日本の朝に元気を与えてくれている大谷翔平選手、最近報道された

た右肘靭帯と右脇腹の状態が気になることのあるが、よい方向に向かってくれることを願うばかりである。七月にアメリカのシアトルで開催されたMLBオールスターゲームにおいて、試合前恒例の「レッドカーペットショー」に登場した際にインタビュアーから、「来年、二〇二四年のレッドカーペットショー、次は違うチームで、違うユニフォームを着てプレーしていると思う？」と去就問題についての質問をされた。大谷選手は、「僕も分からないです。」と苦笑いしながら返答したが、通訳の水原一平さんは、“Only time will tell.”時が経てば分かりま

すよ。」と大谷選手の言いたいことのニュアンスを汲み取って瞬時にセンスのある返しをした。「神谷には、神平がついている。」といったところであろうか。

私は昨年、恩師との再会の機会を得ることができ、今、まさに“Only time will tell.”の感覚を抱いている。昭和五十七年三月、中学一年の終わりにクラス全員で作成した学級文集に寄せたのださった恩師からのメッセージ、『みんなとの生活を通し、私は多くのものを学びました。私の人生という一つの織物に、いくつかの美しい横糸を入れることができたと思います。人生は一つの織物です。横糸と縦糸が織り上げる人間模様です。みんなの人生をすばらしい織物に仕上げてほしい。』

本校は、令和六年三月三十一日をもって一四五年の歴史に幕を閉じる。校区の方ももちろんのこと、閉校を知った校区外に在住の方の来校も多くなってきた。ある日、校長室に掲げてある歴代校長とPTA会長の写真を見ながら、当時の様子を笑顔で、時にはまぶたに涙を浮かべながら話してくださることがあった。応接のテーブルに置いてある創立百周年記念誌(昭和五十四年五月発行)を手に取り、その方は、明治十一年竹屋小学校として創立、二本松小学校との合併、鉄山分教場の創立、統合の校歴をもつ

内山田小学校は、戦争や戦後の貧困、激しい時代の流れを学校の先生方や地域の人々が、その時代、時代を力いっぱい生きてこられ、一四五年の長きにわたる足跡が味のある年輪として今の内山田小学校を育ててくれたとの思いを熱く語られた。

“Only time will tell.”横糸と縦糸が織り上げる人間模様。明治から令和、未来への思いをつなぐ閉校式・閉校記念式典になるよう、校長としての役割を果たしていきたい。

魅力ある〇〇とは

谷山中(市)
玉利 勝美

入学式の式辞の一文を紹介しよう。「あなたの魅力は何ですかと問われたとき、皆さんは、どのように

に答えますか。少し難しい質問かもしれませんが、この魅力という言葉を、『すごいな』とか『素敵だな』という言葉に置き換えてみてもかまいません。皆さんが思う自分自身のすごいところ、素敵なところを考えてみてください。皆さん一人一人には、周りの人から『すごいな』とか『素敵だな』と思われるような自分の良さ、すなわち自分なりの魅力が数多く秘められていると思

います。これから始まる中学校生活では、その『自分なりの魅力』を存分に発揮し、さらに磨き・高め、一人一人が描く夢や希望に向かって大きく成長することを願っています。」

私は、今年度本校に赴任し学校経営方針の中心に「魅力ある学校づくり」を掲げた。今年度最初の職員会議では、歴史や伝統を踏まえつつ、魅力ある「学級」とは、「授業」とは、「人」とは、「地域」とは、それぞれを問い続けることで、学校としての魅力を磨いていきたい、と職員には伝えた。そして、三日後の入学式では、新入生に「自分の魅力に気付き、その魅力をさらに伸ばしてほしい。魅力あふれる生徒に育ってほしい。」との願いを込めて話をした。

約一か月後、人事評価制度における当初面談が始まった。そこでは、「生徒にとって（担当教科）の魅力ある授業とは、どんな授業ですか？」と問うた。「協働的な学びの場面づくり」「日常生活との関連づけ」「ICTの活用」「生徒自らが実感できる」「ほめる・認める」など、まさに新学習指導要領のねらいに迫る言葉が次々と語られた。そして何より、「魅力ある授業」について語る職員の表情が、生き生きとした魅力あふれるものであった。約一か月半にわたる七十人の職員との面談は、私にとつて、実に楽しく元気の湧く面談となった。「魅力

という言葉そのものの意味は辞書を開けばわかるが、「魅力ある〇〇」とは」という問いの答えは十人十色。だから面白い。

結びに「魅力ある校長とは」と自身に問われたとしたら……。私なりの答えは、直接お会いした際にお返しすることとしよう。

一ヲ知レバ……

鹿兒島南特支

芝原 一郎

特別支援教育、特に聴覚障害教育を志したのは高校時代のことである。そのきっかけとなったのは、「石川倉次」という人物に関する記事（書籍であったかもしれない）であったが、なぜ志そうと思ったかは別の機会に譲るとして、氏が残した聴覚障害教育用の語彙集「日用単語」という著書の冒頭に、私が教員になる前からその方策を練り、教員になってからの授業においても常に追い求めてきた言葉がある。

『最モ少時間ヲ以テ最モ覚易クシテ教ヘ玉ヘ
一ヲ知レバ十ヲバ我等自身ニテモ推シ知ラレ
得ル様ニ導カレヨ』

氏は、フランスのルイ・ブライユが考案した六点式点字で初めて日本語を表記した、視覚障

害教育の大家であるが、この著書は氏が聾学校の教員時代に「聴覚障害の生徒たちからこのような要望を聞いている」というスタンスで書かれたものである。

聾学校においては、個別に計画される自立活動の指導を随所にちりばめて、加えて一単位時間に特化して実践しながら、限られた時数の中で小・中・高等学校に準じた教育を行うことが求められる。つまり、指導内容の精選を図るとともに、指導方法の工夫・改善、指導計画の見直しは必須となるが、その作業量は膨大である。

「最も少ない時間で最も覚え易く」を追い求めて随分と長い時間をかけて様々な教授法を試してきたが、納得のいく結果は得られなかった。最近になって氏の言葉を読み返し、答えがそこにあることに気付く。

『一ヲ知レバ……』

「学び方を身に付けさせてほしい」とある。はてさて「学び方」はもちろん個々に違いがあり簡単ではなさそうだが、これは特別支援教育に限ったことではなく、今まさに各学校で取り組まれているであろう教育課題である。

氏は次のような言葉も残している。

『我等自身ニテモ知ラルル様
其方便ヲ授ケ玉ヘ』

読書案内



■齋藤 浩 著

教師という接客業

鶴川内小(北) 川野 博 司

題名が気になって読み始めると、当てはまることばかりだと感じた。公立小学校教諭である著者は、「学校もサービスマンとしての意識を持つべきだ」といったことが声高に語られるようになって、学校は『子どもを教育する場』という本来の役割から逸脱してしまった。公的機関⇨サービスマンを提供する場所という曲解がまかり通るようになってしまった。そして、接客業に舵を切った以上、目指すは『顧客満足度ナンバーワン』ということになる。当然ながら、学校も教師も保護者や地域社会に物申せなくなつて

しまった。」と述べ、原因は、学校に苦情や無理難題を申し入れる少数派の人々に対して、事を大きくして余計な労力を費やすより、穏便に済ませようとしてきた学校側の対応の積み重ねであると考えている。確かに、自分自身も管理職として保護者や外部にそのような対応をし、納得できない部分があったとしても、早期解決を図ったことがあった。また、職員にも同様の対応を求め、結果として職員の不満を高め、やる気を失わせてしまったので、毅然とした対応をすべきだったと、反省している。

では、教師の接客業化を改め、変化の激しい社会の中で、様々な困難を解決して乗り越えていくタフな力を身に付ける子どもたちを育てていくために、「ダメなものダメ」と、毅然と対処していく教師であるためにはどうすればよいのだろうか。著者は、「われわれ教師が正真正銘の専門家(プロ)である必要がある。」「教師が真に教師らしくなったとき、子どもたちの未来は明るいものになるだろう。教師はそのための研鑽に励み、まわりも教師をより立てていく。そうでなくてはならない。すべては、子どもたちのためである。」と、述べている。振り返ると、自信のなさが曖昧な指導と対応につながっていた。プロとして恥ずかしくないよう

び続け、信念をもって対処できるように心掛けたいと考えさせられた。

草思社/八八〇円

■ジエームズ・アレン 著

坂本 貢一 訳

「原因」と「結果」の法則

通山小(隅) 中村 英次

この本は、志布志市校長研修会において、講師として御講話をいただいた、地元で有数の企業を運営されている教育委員の先生より紹介いただいた本である。イギリスの哲学者ジエームズ・アレンによって、ほぼ一世紀前に書かれた本であるが、私の自己啓発として心に強く残った本であったのでここに紹介することとした。

私たちは(私だけかもしれないが)、物事の成果を十分に達成できなかったり、自分の思いどおりに物事が進まなかったりしたときに、つい人のせいにしてたり、周りのせいにしてたりすることが多い。例えば、学校の課題として学力向

上が結果として達成できなかったときには、「子どもたちの実態が。」と、言ってみたり、「この地域には塾がないから。」と、地域性のせいにしてみたりと、なんかかんやと、責任を他に求めてしまう。しかし、この本は、そんな自分をいさめてくれるものでもあった。

本の中では、題名にもあるように、全ての物事は「原因と結果の法則」に従って創られており、周りの環境や成功という「結果」は、すべて自身の内側の思いである「原因」によるものであると、筆者は述べている。つまり、先に例えて述べた「学校としての学力が上がらない」という「結果」は、まさに校長としての自分自身の思いである「原因」がもたらした結果であるということになる。

では、その結果が、自分の思い描くものになるようにするには、どうしたらよいのだろうか。著者は、自身の「思い」を目標に向けて集中させ続けることが大切であると、言っている。つまり、自分の「思い」がいかに強いものであるかどうかということである。

校長職として、いつも最終責任者は自分であるという認識を持ち職務を進めているつもりではあるが、様々な学校経営の中に存在する課題の解決に向け、自分自身の思いや姿勢を問いただ

すよいきっかけとなる本であった。

サンマーク出版／一三二〇円

■寺崎 千秋 著

校長の条件

曾於高 寶藏 大作

この四月に校長職を拝命し、早いもので四月が経過した。振り返ると何をしてきたか覚えていないほどまぐるしく過ぎた日々であった。決裁板の山と次から次にやってくる人の波、そして、極めつけは出張の多さである。落ち着いて生徒の学習活動や職員の授業風景、放課後の部活動の様子を見て回れた日が何日あったであろうか。

そんな忙殺されそうな毎日を送る中で、いつも頭の中にひっかかって離れなかったのは、全校朝礼で話す内容である。本校では月に一度しか設定がなく、この限られた機会を有効活用するためには用意周到な事前準備が必要となる。本校生にとって何が旬なのか、決して説教では

なく、生徒が自然と傾聴したくなるようにするために、生徒がどのようなことに興味関心を抱いているかのリサーチが重要である。

しかし、何よりもまして一番の難解点は、生徒に話をするようにして、いかに職員に聴いてもらえるようにするかである。校長講話はまだ数回しか実施していないが、生徒は私の下手な話をよく聴いてくれていて、先日も畜産食農科三年生の男子生徒が校長室を訪れ、「校長先生は日頃どのような仕事をしているのですか。」と尋ねてきた。自分自身の高校時代を振り返っても、何か悪いことをするか素晴らしいことをしない限り、校長先生と話す機会はなかったことを思い出した。「校長」という存在を、生徒諸君にいかにして認知してもらえようようにするかが今の一番の関心事である。

現代の校長は、時代に付いて行くとか流れに乗るのではなく、時代を先読みする力が問われているように思える。

本書は、十年先まで学校を存続させるためのアイディアに溢れており、実行する際に根拠となる法令が併せて記載されているので頼りになる。私にとって学校経営のネタ元であり、校長職を全うするためのバイブルである。

教育出版／二四二〇円

私は食いしん坊である。食の分野において、一般的に食べることを躊躇するような食材、いわゆるゲテモノでも、召し上がる方々がいるのに、「キヤー。」などと言うのは、失礼極まりない、食して味わうことが大切であると考える側に立つ。

そんな私が鹿児島県採用の教員となり、三十二年余りが過ぎた。転勤で各地を回り、おいしい食べ物と出会い、思い出ができた。今回は、それらについて紹介する。

初任校は、鹿児島市の学校であった。残務整理を済ませた半ドンの午後、校区内の町中華料理店で食べる八宝菜定食が大好きであった。店の主人は、常連客とおしゃべりをしながら、切り株のような丸いまな板の上で食材を切り、次々と油通しをする。最後に大きな中華鍋を振り、食材を宙に舞わせたら

趣味・文芸

私のおいしんぼ人生

菅牟田小(隅) 桑原淳子

るとき、「いつもありがとうございます。本当においしくいただけいております。何か秘訣があるのですか。」とたずねた。すると、「何の秘訣もないよ。先生方が頑張っただけだから、おいしいと感じてくださるのかな。強いて言うなら、めんつゆを少し入れてるよ。」と教えてくださった。

三校目は、ドイツの日本人学校であった。キヤビア、トリュフなどヨーロッパならではの高級食材やチーズ、ソーセージなど本場ドイツの食べ物を堪能した。しかし、思い出されるのは、手作りお菓子である。ドイツでは、手作りの菓

できあがり。一週間が終わわり、安堵した気持ちで主人の華麗な手さばきをぼうっと見て、絶妙な火の通り具合の八宝菜を食べる。今でも鮮明に覚えている一コマである。

二校目は、伊佐地区の学校であった。放課後、職員室に、「ガネ(天ぷらの一種)」を差し入れてくださる方がいらっしやう。それも一度きりではなく、なんとなく疲れたなと思うと、決まってガネの差し入れをしてくださっているのがある。そのガネには、さつま芋、人参、玉ネギが入っていた。生地のお感と塩加減が相まって人生で一番と言える程、おいしかった。あ

子がおふくろの味と称される。現地校ではイベントがあると、各家庭からケーキやクッキーなどを持ち寄り、ビュッフェ形式にして食べる。市販されているそれらの類いのものは概して甘いのに対し、それらはほどよい甘みでおいしかった。また、ドイツ人の家庭に招かれ、手作りのクッキーと紅茶をいただいた時間も忘れられない。夕方から夜にかけて、談笑しながらゆったりとした時を過ごした。ふと我に返ると、辺りは薄暗くなっており、自分がいる客間だけが、ろうそくやオレンジ色の照明で明るく落ち着いた空間になっていた。これが、ドイツ人の言う

ところの「ゲミュートリツヒカイト(居心地のよさ、くつろぎ)」であるのだろうかとう実感した。今思い出しても、夢のようなひとときであった。

四校目は、大島地区の学校であった。独特な食材や料理の宝庫であった。鶏飯、塩豚、ヤギ汁、マダ汁(イカスミ汁)、スガリ(島ダコ)、蘇鉄味噌、舟焼き(菓子の一種)など、挙げればきりがない。その中でも「トビンニヤ(巻き貝の一種)」が大好物であった。塩茹でもおいしいが、保護者が作ってくださったバター炒めが絶品であった。また、年に一度の八月踊りの後の手作りのごちそうも、奄美ならではの食べ物が多く、とても楽しみにしていた。自分の住む班においても、料理を持ち合い盛り付けを工夫して訪問者をもてなした。次々に召し上がったとき喜びは忘れられない。

その後は大隅地区勤務となり、現在に至る。大隅地区は、季節を感じる食べ物の宝庫である。イチゴ、筍、スイカ、山太郎ガニ、自生のキノコ、和栗、イノシシなど、どれも新鮮である。また、「つば焼き芋」のように、おいしい食べ方を教わる機会が増えた。

このように、たくさんのおいしい食べ物と出会い、そして、それらを作り出す温かい方々と幸せな時間を共有することができた。これも、教員は各地に居住でき、地域の方々から大切にされるという恵まれた職業であるからこそである。これからも感謝の気持ちを忘れずに、教職人生と共においしんぼ人生を歩み続けたい。



校区は人なり

妙円寺小(旧) 有馬 純子

はじめに

本校は、昭和五十九年に「伊集院町立妙円寺小学校」として開校し、平成十七年の市町村合併により「日置市立妙円寺小学校」となった。今年で開校四十年を迎える比較的新しい学校である。学校創立後、児童数は平成十年に六八七人とピークを迎え、その後は減少したが、近年は四五〇人前後で横ばい状態が続いており、現在、児童数四三二八人である。開校当時は何もなかった広大な敷地には、当時のPTAや地域住民が一本一本運び植えた樹木が四十年の時を経て、大きく茂り児童の学習活動に生かされている。

二 校区の概要

本校区は、妙円寺団地単一の校区で、閑静な住宅街の中には公園も多く、生活環境は恵まれている。学校周辺は「ゾーン30」に指定され、児童が安全な登下校ができるよう整備されている。保護者や地域の学校教育に対する関心が高く、協力的で、PTA活動や校区公民館活動が盛んに行われている。

妙円寺団地は昭和五十四年に県住宅供給公社が伊集院駅の背後の丘陵地帯に造成した

住宅地である。当時の写真や資料に目を通すと、分譲開始を祝うパレードや街づくりに関するシンポジウムなどが行われるなど、街並みづくりに大きな期待がかけられたことが分かる。当時は、宅地分譲の際の約束事として、各戸の周りには庭木を植樹することが決められていたと聞く。確かに団地に一歩足を踏み入れると、道路沿いは美しい桜やつつじの街路樹が植えられ、緑で美しく彩られた住宅地が広がる。昭和五十五年の第一期分譲以降、現在でも分譲は行われており、校区の世帯数は徐々に増え続けている。令和五年三月三十一日現在で、世帯数二四三五戸、人口六一〇二人である。

三 人がつくる人づくりの町

子どもの減少と世帯の高齢化は、新興団地の宿命であるが、この流れに抗い、将来も繁栄し続ける町づくりを願う地域の思いは、これまで赴任した地域の中でも特に強く伝わってくる。子どもたちが、ここ妙円寺をわがふるさととして健やかに育ち、将来再び妙円寺に戻ってくるようにと、子どもたちのための思い出づくりが盛んに行われている。その中心を担うのが妙円寺地区公民館活動である。毎朝年間を通じて行われる守り隊パトロール、夏はお祭りや中学生対象のソフトボール大会、小学生対象のゴムボール大会、冬はジョギング大会や鬼火たきなど、子どもたちのために思い出づくりの数々が行われている。また、PTAでも、妙円寺詣りなど伊集院地域に根ざした郷土の行事に親子で参加している。

四 校区は人なり

若い世代が住民の四分の三を占める本校区であるが、公民館活動の中心となる方々の多くは六十五歳以上である。若い世代を地域行事に巻き込み、地区の伝統をつくろうとする思いは熱いものがある。温かく人々を受け入れ、住民相互の人間関係を築く。このことが、子どもたちの心の安定につながっていると感じられる。自分たちが地域の大人に守られ、受け入れられているという安心感は、子どもたちを取り巻く環境そのものであるように思う。

「教育は人なり」と言われるが、「校区も人なり」であると思う。本校区は、県内外様々な場所から、この地を選んで移り住んできた人々の集合体である。これが有機的なつながりへと発展するためには、土地そのものの魅力だけでは足りないだろう。先日子どもたちが出演する団地内の夏祭りや、御高齢の男性と話をする機会があった。およそ三十数年前の妙円寺小学校区は、地区としてのまとまりは十分ではなかったという。組織をつくり、人と人と結び付いて、今日のような住民手作りの夏祭りができるまでになったことをうれしそうに語っておられた。八十歳を過ぎていてであろう柔和な笑顔のその方は、本校の校長を定年退職した後、この地に居を定められたという。本校の学校教育目標は、「ふるさとを思い、心豊かでたくましく学びに向かう児童を育成する」である。校区の人々と共に、ふるさとの思いを受けて児童の育成を目指していきたい。

総務部だより

総務部は、四月二十六日の定期総会において承認された活動方針や活動内容に基づいて活動している。今年度は各種会合等が再開されており、その内容の一部を報告する。

一 地区校長会との連絡会

七月十四日に開催した鹿児島市校長会との連絡会を皮切りに、各地区校長会との連絡会を開催した。連絡会では県連合校長協会の活動状況を報告し、各地区校長会の現状や課題等の説明を受け、これらを基に意見交換を行った。主な話題については次のとおりである。

(一) 校長協会事務局から

ア 鹿児島県連合校長協会について

イ 学校予算の要望、人事・給与の要望について

ウ 会員の慶弔見舞規定について 等

(二) 小学校部会から

ア 全連小七十五周年記念誌の購入について

イ 全連小常任理事会での話題から 等

(三) 中学校部会から

ア 次期教育振興基本計画のコンセプトについて

イ 「令和の日本型学校教育」の構築に向けた今後の方向性について

ウ 学校における働き方改革等について

エ 学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関する総合的なガイドラインについて 等

(四) 各地区校長会から

ア 小規模校への教職員の配置について

イ 校務用パソコン等の更新・整備について

ウ 人事評価及び定年引上げ・役職定年制について

エ 入学式実施日等の柔軟な対応について

オ 人事異動スケジュールについて

カ 管理職の働き方改革について

キ 教頭職の処遇改善について

二 教育関係機関・諸団体との連携

本会では各種教育関係機関や団体との連携を強化するために連絡会を開催してきている。今夏は県教委、PTA連合会との連絡会を対面式で開催することができた。

「県教委との連絡会」は、六月三十日に開催し、地頭所恵教育長を始め、副教育長、各課長等との意見交換、情報交換を行った。

秋には主に教職員課との連絡会を開催する予定である。

「県PTA連合会との連絡会」は、七月十五日に開催し、PTAの在り方について意見交換を行った。

主な話題は、次のとおりである。

(一) 県連合校長協会からの事業説明

ア 令和五年度の運営方針

イ 各専門部の活動方針・活動内容 等

(二) 県PTA連合会からの事業説明

ア 基本方針・力点

イ 県P五つの実践、施策 等

(三) 意見交換

ア いじめ・不登校の現状

イ 週休日の部活動の在り方

ウ PTA活動と教職員の参加状況

エ 祭りの際の補導活動の現状 等

三 教育予算等に関する要望

各地区校長会・県立学校からの要望を庶務担当者で集約し、原案を作成。その後、七月二十五日の総務部会での審議及び八月八日の役員会での検討を経て、八月十七日の常任委員会承認された。

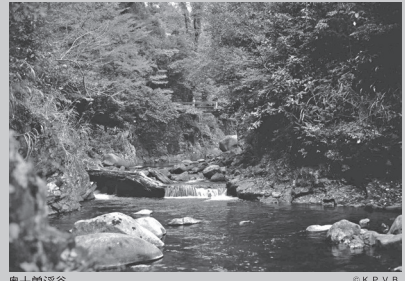
今後、十一月一日に「人事並びに給与に関する要望」と合わせて県教委に直接要望する予定である。

四 総務部会

総務部は小・中・高・特の四校種による連合校長協会の活動を総合的に推進する役割を担っていることから、諸団体や各地区及び各市町村校長会との連携を深め、学校経営上の喫緊の課題に対処するよう、活動の充実に努めている。毎年二回の部会を計画しているが、今年度は四年ぶりに第一回を六月九日に、第二回を七月二十五日に対面開催することができた。第一回では、各校種部会長からの報告の後、令和六年度学校予算に関する要望書作成について協議が行われ、小・中分科会、高・特分科会に分かれて情報交換が行われた。寄せられた要望事項については、第二回総務部会での審議を重ねた。多くの校長の願いが県教委・市町村教委に届くよう活動を進める。

食事、運動、気の持ちよう で遺伝子の働きが変わる。

体内に眠る遺伝子を呼び起こして、才能を開花させるのは全て自分次第である。



奥十曾深谷

© K.P.V.B

提供「僕の贈りもの 日めくりカレンダー」

松山 武史 氏



一般財団法人 県校長会館だより

本年度の県校長会館主催の教育講演会が左記のとおり開催されます。御来場をお待ちしております。(事前連絡が必要)

- 日時 令和五年十二月十日(日)十四時
- 会場 県医師会館大ホール四階
- 講師 桑木 栄美里氏

(声優・ナレーター)

- 演題 「自分を信じて―逆境を乗り越え 夢を掴むまで―私の二十五年」
- 講演で伝えたい思い

いっただって全力、前向き、笑顔な私。だけれど振り返れば、様々な苦悩や葛藤がありました。

生まれつき視力のハンデを抱え、引っ込み思案だった私が、どのように表現の道に進み、「好き」を仕事にしたのか。

ここ鹿児島で生まれ育ち、東京で夢への大きな一歩を踏み出すまでのエピソードを通して、限界の無い可能性を信じて挑戦し続けることの大切さをお話しします。



略歴

二〇一六年 県立甲南高校 卒業
二〇二〇年 お茶の水女子大 卒業
現在、東京を拠点に活動中

編集後記



温泉が大好きで、休みの日は主に県内の温泉巡りをしています。ご存じのように鹿児島県は源泉の数で全国二位を誇ります。温泉の乏しい福岡県出身の私にとって、鹿児島県は夢のようなところです。泉質も温泉地によって多種多様で、その地域で愛され育まれてきた湯治場や浴場があり、歴史や文化を感じています。そのような場所を巡りながら、ゆったりと湯に浸る時間が私にとっての癒しになっています。

さて、月刊「鹿児島の教育」九月号を皆様のお手元へお届けすることができました。まずは、ご多用の中、玉稿をお寄せくださいました方々に感謝申し上げます。

初めて編集作業に携わり、改めてとても貴重な会報誌だという思いを強くしました。全国でも珍しい連合校長会の会報誌ならではの多校種のことを知ることができました。また、学校経営に関することだけでなく、随想や心に残るひとこと、趣味・文芸等、興味を惹かれる豊富な内容に溢れています。そして、なんとといっても南北六〇kmと長い県土の多様な風土、生活、文化の中で、愛され育まれてきた特色ある学校の様子に触れることができます。私にとっては、失礼ながら湯巡りをしながらその地域の歴史や文化を感じているときのような気持ちで愛読しています。

最近、ある温泉地を訪ねた際、浴槽の底の砂利の間から、温泉がふつふつと自然湧出する様に感動しました。少し老いた体に泡とともく、元氣、やる気をふつふつと沸き立たせようと思うことでした。

前田浩二(武中学校)